

<前回>宗教批判2、マルクス・キルケゴール

(1) マルクス

- ①人間社会に宗教が生じたのは単なる偶然ではない。宗教は欲求の疎外形態における実現（否定的な媒体）であり、人間の現実生活の一契機なのである。
- ②宗教批判と政治社会批判とは密接に関連
- ③宗教は人間社会の歴史において必然的に生じたものであるが、その歴史的条件が変化するとき、必然的に終焉を迎えるはずである。
- ④宗教を不可欠の契機として含まないような現実世界の構築

・ジジエク：ラカン派マルクス主義。

↓

キリスト教思想とマルクス主義の新しい関係構築の可能性、宗教社会主義論の再開。

(2) キルケゴール

1：キルケゴールの思想的特徴

- ①宗教批判者としてのキルケゴール(1813～1855)
- ②反ヘーゲル主義 → 実存主義の先駆者
- ③仮名と実名の二種類の著作 → 思想の表現形式、レトリックに注目

2：キルケゴールの宗教批判（現代批判と市民社会のキリスト教）

2. 「コルサール事件」（1846年）、週刊新聞『コルサール』（ゴシップ暴露）
3. キルケゴールの現代批判（『文学評論』の第2章）
 - ・革命の時代と分別の時代（反省の時代、情熱のない時代）
 - 水平化と外面性 → 新聞などのマスコミと世論・公衆といったもの
 - ・宗教的信仰：個々人の救いの問題、個人ひとりひとりの事柄
 - 宗教者にとってきびしい試練、修養 → 「良き戦い」として人生（天路歷程）
 - ・沈黙、無関心を装った教会 → 非人間的大衆化社会を批判し真のキリスト教を守るべき使命をもつ教会（戦う教会）という任務の放棄

3：単独者の思想

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、— かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任を一人で担いながら、神の前にただひとり立つことである」 → 単独者 → ルターの信仰

- ①人間論の伝統
- ②人間の自己：自己関係という構造を組み入れた関係的存在
 - 無限に多重化する存在者である（生成過程における自己）
- ③自己＝生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者 → 本来的な自己になるという課題
- ④関係存在としての自己の存在根拠
 1. 人間は自己自身の中にその存在根拠を有する → 自己組織化
 始まりの問題（宇宙の始まりのその前）と無限遡及のパラドックス
 2. 関係存在の措定者を自己ではない他者として考える立場

⑤人間＝自己関係的存在→自己になる課題→不安と絶望の可能性

4：実存弁証法と真のキリスト者への道

4. 「美的段階 → 倫理的段階 → 宗教性A → 宗教性B」：精神の発展プロセス

5：キルケゴールの問題性

9. キルケゴールとマルクス、ニーチェ

- ・キルケゴールとマルクスとを関係づける必要性。
- ・ニヒリズムの問題への取り組み。

10. 個人と社会・共同体との関係、個人の主体性の強調→単なる抽象論、
大衆の蔑視→エリート主義あるいは単なる変わり者

9. 宗教批判 3 —— ニーチェ

1844-1900

1. ニヒリズム (Nihilismus)

いかなる意味で現代的か。

2. ニーチェ的な思惟：『ツァラトゥストラ』(1883～92)、遺稿集『力への意志』(1906)
断片性 → 体系的理解？

体系的思惟とは別の知

cf. キルケゴール、ハイデッガー、そしてポスト・モダン

3. 「ヨーロッパ的なニヒリズム」(Der europäische Nihilismus)

ニヒリズム・近代ヨーロッパの根本的な危機—歴史意識・世俗化

「ニヒリズムの到来とその必然性」(西谷、46)

4. ニヒリズムの発展過程

1) 実践的理論的なニヒリズム：人間の目的の喪失、世界の統一性の喪失→人間の自己否定・生否定

2) 背後世界・真実な世界という虚構の措定＝宗教：第一のニヒリズムに対して生存を保持させる対抗手段・プラトニズムと結合したキリスト教的世界観とそのモラル

3) 近代の世俗化＝キリスト教的世界観とそのモラルのが破綻・形而上学的な世界への懐疑 → 高次のニヒリズム＝神は死んだ (Gott ist todt. 『悦ばしき知恵』)

「キリスト教的モラルは、そういう実践的または理論的なニヒリズムに対抗して、人間に絶対的価値を付与し、世界に意味を与え、かつそれに対する知や認識を人間に付与した」(西谷、53)

↓

「ニヒリズムの克服であるはずのものの破綻を通して現われ来った、高次のニヒリズム」(54)

根本的な目的という仮説が幻想に終わる。全体・体系的統一という信念の喪失。

目的と体系を基礎づけていた背後世界(仮構された真実なる世界)への不信。

4) ニーチェ：ニヒリズムを徹底化によるニヒリズムを克服、自覚的ニヒリズム

「ヨーロッパの最初の完全なるニヒリスト、しかもニヒリズムを自己の中で終わりまで生き抜いた者、ニヒリズムを、自己の後ろに、自己の下に、自己の外に持つ者として」、「自己において歴史を実験することである」「実験的認識」(47)、「実験哲学(Experimental-Philosophie)」(48)

5. キリスト教批判：「キリスト教のモラルは生の徹底的否定に立脚している」(西谷、50)。

- a) キリスト教＝現実世界を越えた神の国・天国の約束＝現実否定・現実逃避
→ 覆面した無自覚のニヒリズム cf. デモクラシー、社会主義、科学
- b) キリスト教＝強者にたいする弱者の自己保存、反抗、ルサンチマン、「同情、共苦」
(Mitleiden) のモラル
6. 生の肯定と生の否定 → シュヴァイツァーの「生への畏敬」(『文化と倫理』)
生の肯定と共感・共苦
本能が倫理性になるために。
7. 新しい価値を創造、自己＝運命(ego fatum)、運命愛(amor fati)、永遠回帰(die ewige Wiederkehr des Gleichen)、生の肯定→「無限の反復」を意欲する。超越の答えのないことに耐えつつ、ルサンチマンを抱かずに、この世界と人生(運命)の一切を「そうあることを私は欲したのだ」と肯定する。
8. 力への意志(Der Wille zur Macht)としての生の肯定＝英雄的貴族的ヒューマニズム。
すなわち、超人。
「自己は、生成する世界の直中であって、その世界を、またその「必然性」を、自己の意志となし、それを肯定する。世界とその偶然を、創造する権力意志から必然として肯定する。」(西谷、78)
cf. シモーユ・ヴェイユ：必然性＝重力
『重力と恩寵』ちくま学芸文庫
神の創造＝被造物に場を与える
自己収縮、世界からの後退
9. 「自らを塞いでいた欺妄をも肯定する。」(80)
→ キリスト教も民主主義も科学も肯定することにならないのか？
精神の三様の変化：駱駝 → 獅子 → 小児
キリスト教の意義と問題
「キリスト教の育て上げたキリスト教的「誠実さ」Wahrhaftigkeit」(西谷、66)、
「そういう良心の鋭敏さ」を、「その母胎であるキリスト教のモラルに対しても向けられる。」(68)＝虚構であることを自覚すること。
再帰性！
10. 評価と批判
- ①最高価値としての神の死＝歴史の運命
この運命はなぜ生じたのか。偶然か。あるいは、本当にこの運命は到来したのか。
- ②キリスト教理解の一面性
生の徹底的否定とはキリスト教に、キリスト教のどの面に妥当する議論か。
「キリスト教による「自然性の剥奪」」(西谷、60)は、近代以降のキリスト教には当てはまるとしても、それに先行する1500年間にも当てはまるか。
あるいは、「自然＝善」？
- ③ニーチェからポストモダンへの展開に見られる、「哲学者の神とキリスト教信仰の神との同一視」の問題。
存在一神論(Onto-Theologie)の神(最高価値・最高存在としての神)
と信仰の神(十字架につけられた神)との単純な同一視？
- ④生の肯定か弱者への愛・共感か
生の自己肯定の原則は、現代世界でいかなる場を持つか。

倒錯的ではない共感はあり得ないのか。

↓

強さとは何か

⑤超人・永遠回帰という宗教、「永劫回帰を然りと肯定する意志」(100)

宗教的なものの意義

これ自体が、「架空の概念」でないのはなぜか。さらに再帰的な批判は？

⑥現実と虚構の二分法の限界。虚構は単なる否定なものではない。ニーチェもこの点には気づいてはいるが、中途半端である。

「イリュージョンも人間の保存と向上のためには必要であると考え。イリュージョンの源泉は、どこまでも維持せられねばならぬともいっている。仮象への意志というものは、実は権力への意志によって裏づけられている。その意味において一つの手段とも見られ得るものである。権力意志は常に虚妄を破って自己の真実に達しようとする。これは誠実さによるのである。しかし「真理」として固定されたものは再び虚妄となり仮象となる。つまりそれは生の成長を阻み、権力意志の生成に没落をつけるのである」、「すべて「真理」の背後にかかる権力意志の自己欺瞞があるのである。」(68)

↓

では、固定化を回避すれば、よいのか？

11. 想像力とは、この固定化を否定し相対化する機能をもっているのではないのか。

↓

宗教的知恵の重要性

転換的知恵、現実批判あるいは相対化

<参考文献>

1. *Friedrich Nietzsche Samtliche Werke. Kritische Studienausgabe*, de Gruyter.
2. Friedrich Nietzsche. *Werke in vier Banden*, Bergland-Buch.
3. 『ニーチェ全集』理想社、『ニーチェ全集』白水社（「1」の訳）。
『ニーチェ全集』（全15巻、別巻4）ちくま学芸文庫。
4. K.レーヴィット『ニーチェの哲学』岩波書店。
5. ハイデッガー『ニーチェ I II』
『ニーチェ、芸術としての力への意志』
『ニーチェ、ヨーロッパのニヒリズム』創文社。
6. 山崎庸佑『ニーチェ』講談社。
7. パネンベルク『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。
8. ピヒト『ニーチェ』法政大学出版局。
9. 西谷啓治『ニヒリズム』（著作集・第8巻）創文社。
10. 氣多雅子『ニヒリズムの思索』創文社。
11. 川原栄峰『ニヒリズム』講談社現代新書。
12. 森三樹三郎『神なき時代』講談社現代新書。
13. カミュ『シーシュポスの神話』新潮文庫。
14. 小坂井敏晶『民族という虚構』『責任という虚構』東京大学出版会。
15. リクール『イデオロギーとユートピア 社会的想像力をめぐる講義』新曜社。
16. クロッサン『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。